

## 川村先生のご定年に寄せて

### —感謝を込めて—

島田博祐

今春、川村秀忠教授が定年を迎えられることとなった。本大学における在籍は3年と短い間であったが、教育学専修・通信制大学院等に対する貢献はいうまでもなく、私個人にとっても多大なるご指導をいただいた3年間であった。略歴にも示されている通り、先生はLD等の発達障害の問題に対し、教育分野で未だ十分に認識されていなかった1970年代から取り組まれており、まさにパイオニア的存在であった。

実は先生ご本人と知己を得る20年以上前に、書籍（おそらく「発達の気がかりな乳幼児の早期発達診断・川島書店」だと思う）を通じ、お名前は既に存じ上げていた。たしか養護学校教諭（現・特別支援学校教諭）課程のI先生の講義テキストだったように思う。ただ当時の私はモラトリアムの典型で、1年弱勤めた広告代理店を辞め、学士入学したのはいいものの明確な目標を未だ持てずおり、養護学校教諭課程の授業も何気なしに履修していたに過ぎない。それ故に、失礼ながらテキストの印象も“つまらなそうだな”という感じで、一夜漬けの試験勉強以外にはほとんど手にとることはなかった。細かな事情は省くがいくつかの経緯があり大学院に進学し、当時の指導教授であった早稲田大学教育学部の三島二郎先生（故人）のサポートとして特殊学級の巡回指導を行うこととなった。その際に改めて川村先生のテキストを読み返すと、非常に具体的でわかりやすく、眼前にある対象児童の行動を解釈するのにとても役立つことを覚えている。

明星大に奉職してから養護学校教諭課程を作ることになり、諸先生方や事務方の力をお借りしながら何とか創設したのはいいものの、その翌年、文部科学省の通達で教育課程を特別支援学校教諭課程として刷新しなければならなくなり、大幅な科目改訂や科目増、三人以上の同分野専任教員などの条件を強いられることになった。そんな時に川村先生に通信制大学院の兼務も含め、明星大に来ていただけることになった。かつてテキストで学んだご高名の先生に来ていただけるという喜びや期待とともに、“権威的でうるさい爺さんだったら嫌だな”という思いも正直あった。

しかし実際に知己を得て、そうした不安は雲散霧消した。先生は同分野の権威でありながらそれを少しも誇ろうとせず、普段は物静か且つ謙虚でありながら、常に事の本質を見

据え、いざという時には主体的に事を進めて下さる非常に頼りになる方であった。ご自身の広い人脈を生かし、科目増に対応した教員集めも含めて自ら先頭に立ち、教育課程の充実に多大な貢献をしていただいた。

個人的にも、自身の要領の悪さからうまく事が進まずイライラを募らせる私に、“まあ島ちゃん、焦らないでいこうや”と優しく温かい声をかけていただいたこともしばしばであった。先生の業績欄を改めて見ると、様々な方々との共編著も多いことに気づく。これは人心を惹きつけ、まとめあげることができる人徳の証拠と考える。改まった形での最終講義の設定を固辞された点も、誠に先生らしく感慨深かった。そうした引き際はまるで、潔く清廉な武士のそれを思わせるものがあった。

先生に関しては語り尽くせないことが多々あるが、今後のご多幸と益々のご活躍を祈りつつ、感謝の気持ちを込めて送別の言葉としたい。本当にありがとうございました。